

僧服に関する研究(第14報) - 鎌倉時代の禪宗袷の
夏着について -

大阪女子短大

弓削公子

〔目的〕 平安時代の仏教に対する反省と、宋との交流によって伝来し発展した禪宗は、鎌倉時代の他の多くの宗教をも禪風様式へ誘導するほどの勢力を確立していた。殊に臨済禪の場合には現存している資料を中心に、夏季用の僧衣の形態、技法を考察する。

〔方法〕 京都市内の寺、京都国立博物館、京都府立資料館、実物資料により、調査研究をおこなった。

〔結果〕 これまで調査してきた臨済禪の合冬用の僧衣は、裏布が存在しているもので、背、腕の部分には、比較的簡略であったのにくらべ、夏季用のは、一枚布のみということで、可成り丁寧でかつ多岐回な技法(袋縫、三折縫、かぶせ縫)を使用している箇所が多くみられた。殊に、脇の部分の裾布については高度な技術をうかがい知ることが出来た。又、裾縫いでは、前時代の真言宗の流れを一部取り入れてあることが判明した。